

十一月の遊園地

あれは何時ごろのことだったのだろう。季節は、そうちょうど今頃、公園の銀杏の葉が黄金色に輝いてクルクルと舞い、街路樹は色づき、坂道の下のパン屋さんでは焼きたてのパンの匂いが漂っていました。風見鶏の家の中からは暖かい笑い声が聞こえ、丘の上の教会では美しい鐘の音が響いていました。

でも、今は古いノートの中の思い出の日々を読み返しているのです。

「遊園地が閉園になるって、新聞に書いてあるよ。ほら、大きな池のある……」

「ああ、あの遊園地？……、どうして閉園になるのかしら」

「遊園地なんて、もう流行らないんだよ。子供達が行かないから」

「私たちはよく行ったわ。楽しいものが一杯あった。あひるの池でお弁当を食べて、それからメリーゴランドに乗ったの、覚えている？」

「覚えているさ。僕の馬は後ろから、君や子供たちの馬を懸命に追いかけるんだが、いつも最後まで追いつけないんだ」

「それから丘の上の観覧車。まるで空の上の水車のように、夢の時間を回していた」

「ジェットコースターなんかもあったよ」

「あれは嫌いよ。それより貴方が大好きな乗り物があったじゃない」

「そうだ。子供たちも大好きだったよ。なんだったかな、あれは……」

「かもめの艦隊」

「そうだった。でも、不思議だよな。あれって只のモノレールの乗り物だったろ」

「乗り物というより自転車ね。モノレールの自転車」

「それで、遊園地の中を回るだけなのに、どうしてあんなに面白かったんだろう」

「それはね、あなたが少しだけ空を飛べたからよ。子供たちと一緒に」

「少しだけ……？」

「そう、そんなに高い空じゃないけど、地上よりは少し高い。ほら、かもめの艦隊って、ちょうど遊園地の建物より少し高いところにレールがあるじゃない。だから屋根の上を飛んでるように感じる事が出来たのよ」

「そうだった。僕はいつも、どこかの町の上を散歩しているような気分だった」

「それにあれは自分でペダルを漕いで進むでしょ。何だかフラフラした感じでゆっくりと、ほら、ちょうど今、私の上を飛んでいくわ」

「君はいつも僕たちが空の上を散歩するのを、嬉しそうに見ていたよ」

「私も乗ればよかったわ。私はいつも下で待ってるだけ。ばかなことをしたわ」

「君だって乗ればいいじゃないか。ほら、乗ってごらんよ」

「あら、これちょうど二人乗りになってるじゃない」

「ちゃんと安全ベルトを締めるんだよ。落ちないように」

「バカね。落ちるもんですか。でも思っていたより高いのね」

「いいかい、最初はゆっくりとだよ。屋根の上から見える町って、いいだろう」

「ほんと素敵ね。なんだか魔法使いになったような気分」

「ほら、あの木の向こうの町がメルヘン広場。パン屋さんは白雪姫と七人の小人たちの小屋。みやげ物屋は赤頭巾のおばあさんの森の家。それにトイレだって三匹の子豚の家になっているんだ」

「道化師や、辻音楽師の回りは子供たちでいっぱい」

「銀杏の木の下で、オルガンに合わせて町の人たちが踊っているよ」

「あのレストランやコーヒー店の通りは、外国の町並みみたい」

「ロンドンのベーカー街だよ。外に立ってるのはホームズさんとワトサン博士さ」

「あら、どこなのここは。なんだか静かなところ」

「それに、なんだか暗くなってきたよ」

「怖いわ。あれは何。ほら、月の光の中をこちらにやってくる！」

「あれは銀河鉄道だ。ほら窓からジョバンニや、カンパネルラが手を振っている」

「本当。私たち銀河の中を飛んでいるんだわ！」

「君の傘を広げてごらん。きっとどこまでも飛んでいくよ」

「あなたの帽子は、ほら大きな帽子。あれなら私達、何処までも飛んでいけるわ」

- - 気がつくとも私たちは笑いながら手を取り合って踊っていました。それは本当に楽しい時間でした。そんな私たちの耳に遠くからあの音楽が聞こえてきたのです。懐かしい、けれども少し寂しい音楽。遊園地の終わる音楽。気がつくともいつも遊園地に残っているのは私たちだけでした。

私たちは急いで出口に向かいました。急がないと遊園地の扉が閉まって、私たちだけが遊園地の中に取り残されてしまう。

そんな私たちをいつも誰かが、手を振って見送ってくれたんです。あれは誰だったのだろう。みんなで遊園地に行ったことも、メリーゴーランドのことも、カモメの艦隊のこともみんな昨日のここのように覚えているのに、最後のところだけまるで黄昏時の西の空のように朧げにかすんでいる。本当にあれは誰だったのだろう。私が次の日曜日、思い出の遊園地の最後の日に出かけたのは、そのことを確かめたいという気持ちも、あったのです。

「やっぱり、なくなったらしいよ。カモメの艦隊は」

「カモメの艦隊だけじゃないわ。子供達が大好きだったものが、みんな無くなっている」

「それに、どうしてこんなに人が少ないんだろう。もう閉園したみたいだ」

「一輪車とオルガンは残っていたけど、もう道化師も町の辻音楽師も、誰もいない。道化師の服だけが、葉の落ちた公園の木にかかっていたわ」

「まるでゴーストタウンだ。みんな何処へ行ってしまったんだろう」

「そう、あなたは、あの時もそんなふうにして探し回っていた。ほら、子供たちが私たちの前から居なくなってしまった時よ」

「そうだ。子供たちが居なくなった日、僕は必死になって探し回った」

「でも子供たちは帰ってこなかった。ハメルンの笛吹き男がやってきて子供たちを連れて行ってしまったんだわ」

「ハメルンの町の子供のように、笛の音に踊らされて行ってしまった」

「あなたが悪いのよ。あなたのせいよ。あなたには私や子供たちより大切なものがあつた。あなたのせいで、私の大事な子供たちは行ってしまったんだわ」

「そうだ。僕が子供達のことをもっと考えていれば、こんなことにはならなかつた」

「いいえ、違ふわ。私が悪かつたんだわ。私の夢をあの子たちに押しつけたのがいけなかつたんだわ」

「違ふよ。誰も悪くなんかないさ。子供たちは僕たちの腕の中から飛び立つ時が来たただけなんだ。いつかどの子もハメルンの笛吹き男に連れられて、山の向こうへ行く時がくるんだ」

「あなたはいつもそうよ。なんでも理屈で片付けてしまう。あなたは淋しくはないの。もう道化師も辻音楽師も私たちは見る事ができないのよ。もう私たちはこの遊園地には帰ってこれないのよ」

「そうだ。もうすぐ門が閉まってしまう。急がないと帰れなくなってしまう」

「ほら聞こえてきたわ、あの音楽。あれは遊園地が終わる時に聞こえていた音楽」

「聞こえてきた。僕にもはっきりと聞こえてきた。少し寂しい、けれどもとっても懐かしい音楽。あれは何というところだつたんだろう。いつもこの音楽が聞こえてきたら、急いで僕たちはそこへ行つたんだ」

「夕日通り。確かそんな名前だつたんじゃないか」

「そうだ。サンセット通りだ。でも、もうあの人たちはいないんだろうな。ほら、いつも僕たちが帰るときに見送ってくれた人たちは」

- - そうなんです。サンセット通り。この静かな外国の町のような通りはそんな名前がついていたはずです。ペンキのはげた家のドア。ガラスの割れた窓、二階のテラスはテスリが腐つて半分崩れ落ちて、そう、ここもまるでゴーストタウンのようになっていましたけど、不思議なことにここだけは、あの頃と変わっていないように私には思えました。私はあの人たち、サンセット通りの人たちの姿を捜しました。でも、もう三十年も前のことなんですもの、あの人たちがここにいるなんて本当にありえないことなんです。

私はいつか夫や子供達と歩いた道を懐かしむように、ゆっくりと歩いていました。その時です。まるで南国の家のような、しゃれたテラスのある家の二階の窓が開いて、女の人が出てきたと思うとヒラヒラとハンカチを振っているではありませんか。まるでそれが合図のように、となりの家の扉からは、男の子と女の子が飛び出して手を振ったり、ある家のベランダには、おばあさんが出てきてにこにこ笑っているのです。私ははっきりと思い出しました。そうだつた。貴方たちはお人形だつたんだわ。そして三十年前とおなじように私を見送ってくれるのね。みんなペンキの色は剥げ落ちて、ところどころ壊れているけど、でも元気そう。長い間ご苦労様。貴方たちも今日が最後でしょう。私はもう一人ぼっちになってしまつたけれど、貴方たちは私の楽しかつた時間の中に、いつまでも生きています。本当に、本当に長い間ご苦労さま。

(終わり)

11月14日 名草山・和歌浦の故地巡りと秋の万葉植物鑑賞



「とうとう、やってきましたね」と、馬場先生が言われたんです。和歌川河口の観梅閣で、麻殖生さんの緑泥片岩の説明を聞いている時です。ほら、川の中の杭に一羽ずつ止まって、ゆりかもめ達がいたでしょう。今年も彼らがやってきたんです。たぶん遠い昔に、山辺赤人がここで、この歌を詠んだ時のように。

若の浦に 潮満ち来れば 潟をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る

今日、僕達はこの歌の風景を求めて和歌浦を歩きました。それは同時に神亀元年にこの地に行幸した聖武の足跡を辿る旅でもある筈です。冊子を見ると、「10月8日 海部郡玉津島頓宮に至りて、留まりたまふこと十有余日」とあるから、2週間ほどここに居られた訳で、赤人の歌はその時に作られたということでした。

ところで、この10月というのは旧暦ですから、時期としてはちょうど今頃の筈です。今日は11月14日、タイムリーな企画のポポアのことから、もしかしたらと思って、家に帰って今年の暦を見てみたんです。すると11月14日は旧暦の10月9日！、まさに聖武天皇がこの和歌浦に到着した日の次の日！、ピンゴじゃないですか。赤人がこの歌を詠んだのは、たぶん「今日」だったのです。

ただ、当時は今よりは寒かったでしょう。名草山から眺められる風景は、もっと寒々としたものだった筈です。紀の川の河口が海と交わり、その中に幾つもの島山が海中に点在している。今の和歌山市外のあたりは広大な葦原の湿原が広がり、目の前の入り江の干潟には、沢山の鳥たちが集まっていた筈です。赤人は玉津島の上からその風景を眺めていたのでしょうか。日没近くなって潮が満ちてきた頃、突然、彼らが一斉に飛び立って、葦原湿原を目指して羽ばたいて行く。その後から、彼らに遅れまいとして、西日を背に浴びて懸命に飛んでいく一羽の鶴を赤人は見ていたのです。もしかしたら彼も見えていたのかもしれませんが。聖武天皇、その時24歳。彼もまたその鶴と同じように、冬空に向かって羽ばたこうとしていたのです。

焼肉弁当は肉が柔らかくて、絶品でした。ちなみにここで弁当を配っていた娘さんは、お城の近くの短大で万葉を教えている馬場先生の教え子なんだそうですね。

玉津島神社の上で見た、エレベーターのコンクリートの基礎の話ですが、これは明治43年に旅館「望海楼」が作った高さ30mの日本初の鉄骨製エレベーターなんだそうです。エレベーターで上に登って、陸橋で山に渡るようになっています。だから残っている基礎は陸橋のものなのでしょう。いずれにしてもロープで山へ引っ張るとか、そんないい加減なものではない。和歌浦の賑わいが偲ばれます。

ハマユウ、アシビ、カラタチ、ヤマスゲ(ヤブラン)、ツワブキ、オオヤマキ、ツボスミレ、コウヤボウキ、イヌビワ(チチ)、ハギ、クヌギ(ツルバミ)、ハゼ、ネム、ヌルデ、サワラギ、ヒサギ(アカメガシワ) 名草山で見た万葉植物、出会った順番です。今日の参加者47人、横浜から新幹線で日帰りの人も居ました。